

カット 皆川泰蔵

愛国心と戦争

吉田 実

愛国心は戦争につながる、と私が言えばいかにも突飛な言葉だと、中には憤慨する人もあるだろう。これが愛社心とか愛校心だとかになると、よき意味においての競争という連想も生まれて、同じ愛という字がついても大分ニュアンスが違ってくる。

最近或る筋から急に愛国心という言葉が

想

押し付けられるように流れ出し、それと裏腹のように、国防とか軍隊という言葉までが、急に新聞にしばしばと現れ出し、遂には大臣の失言問題にまで発展し、国会と開店休業になってしまった。

同じ地球に住む同じ人間が、たまたま一地域に生れ、その地域に住むというだけで余り団結にこだわり過ぎると必要以上に排他的になり、その地域その国だけが何か特別な優越感に溺れ、或は独特な権威でも構成しているかのごとき錯覚に陥らないとも限らない。

日本にも昔、戦国時代とか、源平時代とかと呼ばれ、地方の豪族、武士が各その地方に自分の権力を確立し、互にその勢力の拡張にしのぎを削り、戦いに明け暮れしていた時代があった。その頃には川をへだて山を境にして越後の国とか甲斐の国とかに分れ、同じ日本人がお互に殺戮を事としていた。そんな国名は今でも残っていて、言葉までが違っている。川を馬で渡りながら「ヤアヤア遠からんものは昔にも聞け、近くは寄って目にも見よ、われこそは……」などと名乗って、自分の生れた国のため、

そしてその国に君臨するお殿様のために、同じ日本人同志が命を捨て、戦い、天晴れ忠臣勇士の誉れを立てることに浮き身やついたものだ。今から考えると愚かどころか滑稽にさえ思えるのだが事実だったのだから仕方がない。

さてそれならなぜ当時は称賛されたものが、今ではおかしく思えるのだろうか。もちろん封建思想がその根底になったとは言えその思想を培った当時の日本の国情、環境、更には時代的流れから見た「未開」性「非文化」性にあつたことは否めない。そして今では当時の川や山の境界が、日本海や太平洋になったまでのことだということに人は余り気付かないようだ。成申の役に会津の人があれまでに恨んだ鹿児島人に対する感情も、今となっては歴史を理解すれば互に手を握って笑いあえるだろう。太平洋戦争で米鬼、英鬼と呼んだ、アメリカ人やイギリス人も現在に至れば大いに尊敬すべき幾多の美点を持った先進的人種に変わりはない。超音速機が発達すれば、数時間で地球の果てまでも行けるし、その国と人を識り尽せば誤解も生れない。何も殺し合いを

随

してまで意地を通す必要はサラサラないわけだ。愛国の国が薩摩の国から日本國に変わっただけでは戦争は絶えない。下手に愛國心を煽れば煽るだけ戦争の危険は増して行くというものだ。もつと眼を世界の隅々にまで拡げ、思想の根底を「愛世界」「愛人類」心にもまで昇華させ、一日も早く世界を挙げて、戦争否定の次元に到達させることが出来ないものだろうか。

(大13大学予科卒・八幡製鉄常務取締役)

相国寺の墓地

加藤 仁 平

相国寺の墓地に私の親しい人が二人眠っている。一人は同志社女子部を熱愛して九十一年の生涯を終ったミス・デントンでありもう一人は京大総長だった恩師小西重直博士である。

日米開戦の少し前、宣教師たちが帰米についで、の会議を同志社で開いた。「最後の船では遅いからその一つ前で」と話しあっ

たとき、デントン一人口を開かない。牧野虎次総長が、「ミス・デントンは」と発言を求めたら「ナット バイ ラストボート、バット バイ ファーストボート」(最後の船では帰らない。しかし平和になった最初の船で)といったので、あとは誰も発言しなかった。その後、総長が『滞日十年』で有名なグルー大使にあつたとき「デントンはどうしている」と聞かれたのでこの話をしたら「いかにもデントンらしい」といった。終戦になったときデントン女史は総長にむかつて「自分は戦争中、日本に滞在したが、一度も敵国人として扱われたことはなかった。シビリアンが渡米できるようにになったら、アメリカの友人たちに日本人の友情を伝えたいから、その時は同行して証人になってくれ」と頼んだ。その機会はまだ来ないうちに亡くなったが、生前占領軍司令官マッカーサー元師に親書を送って、日本天皇の徳をたたえ、その優遇を懇請していたことは、女史の死後、宮内庁側から伝えられたことであり、叙勲に当たっても破格の待遇を受けた。

これは私が、新島先生のことをきくため

に牧野さんをお訪ねして直接承った実話であるが、あのわがままなお婆さんに、こんなすばらしい面があつたことを知って私は感動した。ご縁のあつた方がたにお願いしたい。「太平洋の架橋」となつたデントンのさんの美しい面を一つでも多く、今のうちに書き残しておいていただくことは出来ませんでしょうか。

小西重直博士は教育者として教育学者として最もすぐれた方の一人であつた。理論的教育学の最高權威ともいふべき故篠原助市博士は、先生の『教育の本質観』を讀んで「先生は実に頭腦で語られるのでなく、一句一語が脈管の脈動として心身全部から血肉として表現せられるのである。黙してその音なき声を聞かれよ。自然に聖者のおもかげが髣髴と浮び上がるであろう」と感嘆された。

日本における大学の自治、学問の自由の闘いとして史上最大といわれるのは京大・滝川事件であるが、当時、文部当局に対してもつた小西総長の態度が、根本史料である『京大事件』(岩波書店・昭和八年刊)において「大学における学問の自由独立の精

神を多年生き生きと保持し来った京都帝國大学の総長としての權威にふさわしいところの、そして全京大教授および全京大学生の信頼を荷いつつピラミッドの社会体の頂点に立つ公人の面目をはずかしめない所の見事な態度で、「教育者」としての小西博士の学者的生涯をかざる最も顕著な事績の一つにかぞえられるべきであろう」とあったものが、二十九年後の「朝日ジャーナル」の座談会その他においてむごたらしく変容されたことに対しては、心ある人々をして悲憤の涙をしばらせたものである。

私はそれに対して数篇の学術論文と単行本『小西重直の生涯と思想』（黎明書房、昭和四十二年刊）とを発表したが、昨年十一月三日京大創立七十周年記念式典においては式辞、祝辞ともに、小西総長の態度を京大の誇りとしてとりあげていた。たまたま記念式典に出席してこれを聞いた私は感涙止めあえぬものがあり、車を駆って相国寺大明寺の墓地に先師の靈を弔った。

（関東学院大学教授・元女専講師）

四つの階段

池田 庄太郎

昭和四十三年正月を迎えて一詩をつくり

新玉の年を迎えて思ふかな

人の命の長くもあり短くもあり

人生も七十歳をこゆれば親兄弟、友人先輩知人と多くの人が夜あけの星の一つ消え二つ消えるごとく、今更のごとく淋しさと人生の無常とあじけなさを感ずることがある。古歌に「鳥辺野の昨日も今日も立ちのぼるながめて通る人も何時かわ」いくら大成功しても何に一つ死後持つて行けるものでもなく、煙のごとく消えて行く極りある人生は無限から無限、永遠から永遠の力を求めて宗教心が自然に生れくると思う。ついでに過ぎこし過去のことを頭に浮ぶままに書いて見よう。

同中会で話したことがあるが、小生らの同志社中学時代にはなかなか運動が盛んで強いのが多くいた。中学生で大学の人々に

稽古をつけてやる時代であった。ランニングでは故佐伯巖君、柔道では亀山克一君、有田志朗君、剣道では藤井君、相撲部では池田庄太郎や当時快男子・応援団々長故米村嘉一郎、政治家で有名入故山本宣治氏がいた。小生は卒業後、関西学院商科に入学した。しかるにまた相撲部に引き出されたが、いよいよ勉強がいやになり、兄に相談して外国に行くことになった。

次兄がカナダのバンクーバー市の日加銀行の経営になる Hotel World の支配人をしていたから、それをたよりに横浜港より十七日もかかりカナダのビクトリア港にいた。船は大阪商船のアフリカ丸でホテルにまいってから次兄の下で働くことになった。

しかるに当時シャトル市の三井物産支店長なりし石田礼助氏（目下国鉄総裁）が長兄を見こんで十五万ドルという大金を出資してくれ、シャトル市の自動車の中心街に大きなグラジを買いだし大連に送ることにあった。次兄もホテルをやめて長兄の自動車の事業を手伝うことになったので、次兄の後を受けてホテルの支配人になったが、一

年ほどしてから小生に兄の仕事を手伝うように申したので、ホテルをやめてシャトルの自動車の仕事をするにしようとしたが、なにごとにふん大きな身体で自動車の油の下で働くことは小生に不向きで、兄に相談してシャツのメン街に大きなソフト・ドリンクの店を買って年二十四歳独力で経営することにした。しかるに二カ月はどしてからアメリカ人が突然まきり Will you sell this store? と熱心に申すので Yes, I will sell this store anytime if you bring sport cash. と申したら、次の日現金を用意して来たので手打ちをした。店に何の未練もなかった二十四歳の青年で始めての大金全ううれしかった。

これが小生の初陣の大ヒットであった。小生は学者や給料取になれるがでないことは自分もよく知っている。この金を元手にてニューヨーク市で一勝負をせんと思っている。原田助前総長がニューヨーク市に来ておられたので、次男原田泰さんと大陸を汽車でニューヨークにまいったがニューヨーク市ではそう楽々と、問屋はおろしそうにもなく、独力商売することを断念して一年ほど

で引きあげた。

小生が米国にいて感じたことはアメリカ人が正直で非常によく働くことであつた。また米国人が四つの階段をよく守る事であつた。(一)働き(二)生産(三)貯蓄(四)六十歳になれば第一線より引退して老夫婦で世界漫遊するとか老後を楽しむことであつた。

(大5 普通学校卒・会社重役)

惰 性

八 田 琢 美

サラリーマンの世界に三日三月三年という言葉がある。これは入社してから三日目と三月目と三年目にスランプがくる、ということなのである。入学、就職、結婚など人生にはいくたびか転換期が訪れるが、はじめは新しい世界にとびこむことの感激から胸は高鳴り、一切をそれにぶちこむ気にもなる。進歩は著しく、実力はぐんぐんと伸びていく。しかしながら、自分の環境に慣れる頃には、はじめの感激は消え失せ、

めざましかった進歩も、いつの間にかとまってスランプがやってくる。そしてスランプは三日三月三年だけでないに、次から次へと、ようしゃなく訪れる。どのように興味深い職業であつても、それをくりかえしていくうちには、必ずマンネリズムに陥り惰性を感じるものである。

まことに人間生活には惰性はつきものである。とくに現代のようにコンピューター時代などと称されるときにあつては、人間は機械の部分品のような行動を強制されて単調になりがちで、職場そのものに日々新鮮さを感じることがすくなく、そこに働く者をとかくマンネリ化しやすくする。多少の誇張はあるにしても、入社した当時は誰もまさかその意気や壮。それが三十台から懷疑と絶望をもちはじめ、四十歳をすぎると諦観と虚無にちかい心境に変化しはじめる。惰性がわれわれを支えているわけである。

ところで、これからの企業をとりまく環境は、かつてのような長い年月をかけて人物が成長するだろう式の、のんびりした気持は許されない。技術革新の進展は、機械

設備の近代化、経営管理技術の近代化など
とあいまって高度の知的レベルを求めると
うな職務を出現させているのである。そし
て、企業は種々の手法を用いて能力開発、
教育研修の体制をととのえようとしてい
る。

しかしながら、要は開発の対象となる者
の自発的な「やる気」がなければ、仏作っ
て魂入れずになってしまふ。やる気を起こ
すようになる一つの刺激は、企業と個人が
いまおかれている困難に対する危機意識で
あろう。すぐれたビジネスマンは例外なく
人から仕事を押しつけられるのではなく、
自分の意思で行動する人である。コンピュ
ーターがもたらすビジネスの変貌を予測し
ても、日頃のトレーニングを積んで創造的
な仕事を続ける者は、スランプを克服し惰
性をうち破るバイタリティーをそなえてい
る。

日常の平凡な小さな出来事でも深い関心
をよせ、その解決のためには、ひとつひとつ
について永続的な追究力が必要になって
くる。永続するということを、惰性とまち
がえてはならない。充実した体力と旺盛な

精神力、それに加うるに弾力的な知性があ
ってこそ、高度の発展進歩が実現しうるの
ではないかと思う。

(昭29 大院法卒・第一銀行京都支店次長)

嗚呼ノ寓話明治百年

円 鵲子

昭和元祿。言葉でいづくせぬ桃源境の
プリズムプリズム。キラキラの股間に果食
う「なんかおくれ」病の拡がり。

これまたいらっしやいました。着こなし
といい、目のくぼりといい筋金入りのエリ
ート乞食二人。

乞食1 アノ行列ハ何様ノゴ家中カネ。

ソレニシテモア立派ナ着物。

デツカイ鉄砲マデカツイデ。ン

デモ、氣ノ抜ケタ歩キ具合ダ

ネ。

乞食2

鑄型ニハメラレタ食ツメ者ヨ。
ホレ、昔アツタ新選組ノ手合ダ。

乞食1 ンデモ随分オトナシ顔シテル

ゼ。今時ノ餓饑ドモヨリシオラ
シイジャンエカ。

乞食2

ソウヨ。法ツテモノガアラーナ。

九条様ツテイウ御意見番ガイ
テ。鉄砲ナゾブツパナシテミナ
奴ラオマンマンノ食上ゲダ。ヨク
見テミロ、アノ鉄砲ニヤ引金ナ
ンゾ付イテナイヨ。引金ハホラ

紐デ腰ニツルシテラア。
お理解か。元祿にはいつもいつも聞かれ
る会話。昭和元祿もしかり。やっぱり出て
きた新選組。これまた筋書通り、ただ一人
法を守るわれらが九条様。大権現様第四十
三代目の孫老憲法様の懐刀としてその力量
は銭狂人の大商人や保身術の天才なる官僚
どもの及ぶところではなかったのですが……

……

乞食2

マ俺タチガ半日鼻毛ムシツテテ

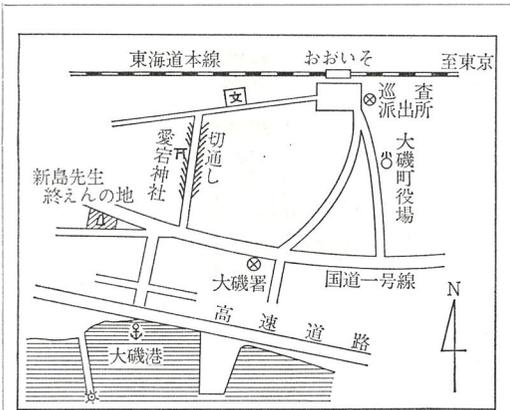
モオマンマニアリツケルノモ、

コレヒトエニ九条様ノオカゲ

サ。

乞食1

ンダ。マ俺タチハ一度ハオ国ノ
タメニ鉄砲カツイダモンナ。九



条様が居ル限り天下泰平サ。

乞食2 九条様が負ケテモ、俺タチニ赤紙ガ廻ッテクルコトハアルマイテ。ナンセ戦ニナツタラ、ヅビカドンクデ万事休スヨ。

乞食1 俺タチノ死ヌマデ戦争ガナケリヤソレデ万事メデタシダヨナ。

背中ノ毛ノ生エタ竜馬よ。まだ寺田屋もある。高瀬川だつてある。おりょうさんに瓜

二つな女だつて、きつと捜してあげます。

乞食1 トコロデヨ。賞与ナンボ。大学出ダシ、会社モデカイシ。ガツポリダロ。

乞食2 大学出タツテ、二流下コノ私学ダモンナ。セイゼイ車デモト思ッテナ。ウン。

乞食1 車ネエ。ヤッパンチガウネエ。俺ナンザ餓餓ノ自転車トカカア

新島先生終えんの地

新島先生は明治二十三年一月二十三日神奈川県大磯町大磯の旅館・百足屋で亡くなつた。「百足屋」は、区画整理の結果、現存しないが、そのあと地、約三十三平方メートルを同社社が買収し、記念碑が建てられている。

記念碑は国鉄・大磯駅から海岸の方に徒歩約五分の国道一号线沿いにある。碑の表面には「新島襄先生終焉之地」、裏面には「新島先生永眠五十周年ニ際シ建之 昭和十五年十月 蘇峯徳富正敬書 石ハ先生故郷確氷ノ産ニシテ半田善四郎君ノ寄贈ナリ」と書かれている。

ノ狐ノエリ巻キ買ツタラシマイダ。

乞食2 ヒサシブリニ、一杯ヤツカ。

乞食1 俺……
乞食2 マーイイッテコトヨ。会社ノツケキクトコアルンダ。ソコナ金髪女ガイルンダ。デツカインダ。

乞食1 ウイーシツシツシ。俺ソソナトコ行ツタコトネーヨ。

乞食2 トコロデ煙草キラシチマツテネ。

乞食1 hiーライト。

そうさね皆様方。もしたよ。金婚老が実は英雄的民族主義者だつたら。三派系全学連が実はCIAの手先だつたら。ベトコンが、わが同志社にアルバイト兵の募集広告を出したら。エトセトラ エトセトラ。ラ・ロシユフコも言っている。

「われわれが美德と思ひ込んでいるものはじつはさまざまの行為がさまざまの利害の寄せ集めにすぎぬ」また言っている。「われわれは皆、他人の不幸に耐えていく力を持っている」とね。

(昭和40大法卒・本部職員)